

マフノー運動

以下の文書は、マフノーの友人で戦友、ピョートル・アルシノフの『マフノー運動史』（一九二八年）からの引用である。この書は、一九六九年にパリで（ベリバスト社）再刊された。

最初の《自由コミューン》

「南ウクライナにおいては、大地主の追放ののち」、土地は農民たちの手中におちた。彼らは、すべてがまだなされたのではないこと、少しばかりの土地を奪い、それに甘んずるのではなくて、敵はいたるところで自分たちを狙っていることを彼らに語っていたし、団結して助け合わねばならぬことを彼らに教えていた。多くの場所で、共同の生活を組織することが企てられた。公式の（政府中心的な）コミューンに対する農民の敵意にもかかわらず、グリヤイ・ポーレ地方の多くの場所で、「労働コミューン」ないし「自由コミューン」と呼ばれる、農民のコミューンが生まれた。そうして、ポクロフスコエ村の近くに、ローザ・ルクセンブルクという名の、最初の

自由コミューンが組織された。そのメンバーたちはすべてが貧民であった。初め、このコミューンには、数十人ばかりのメンバーしかいなかった。その後、その数は三百人以上にまで増加した。

……民衆独得の、魂の質朴さと偉大さをもって、農民たちは、彼らには未知の人、しかし革命闘争の中で殉教者として非業の死をとげた革命の英雄の思い出に、敬意を表したのである。ところで、コミューン内部の生活は、ローザ・ルクセンブルクがそのために闘った理論とは何一つ共通のものとはなかった。コミューンは反権威主義的な原則にもとづいていた。発展しつつ、拡大しつつ、それはその地方全体の農民たちに、大きな影響を及ぼし始めた。「共産主義」当局は、コミューンの内部生活に干渉しようとした。しかし、人々はそれを認めなかった。

……グリヤイ・ポーレから七キロの、元の地主所有地で、グリヤイ・ポーレの貧農たちを集めた、別のコミューンが結成された。それは単に、「グリヤイ・ポーレ農民第一コミューン」と呼ばれた。そこから二十キロの所に、第二、第三のコミューンが見られた。それらはまた別の所にもあった。確かに、結局、コミューンは数多くはなかったし、住民のうちの少数、特にちゃんと設定され耕作された農村の財産を持たない人々しか包含していなかった。しかしこれらのコミューンは、貧農たち自身の発意によって結成されていた。マフノー派の仕

事は、彼らがこの地方で自由コミューンの思想を宣伝したという範囲でしか、それらに影響を持たなかった。

コミューンは、何らかの夢想あるいは模範によってではなく、もっぱら、革命前には何一つ持っていなかった、勝利を得てから共有の基礎の上に自分たちの経済生活を組織し始めた、農民たちの生存の必要の結果として、創設された。それは、共産党の人工的なコミューン、種子を消費し土地を傷める、国家と政府の支持を享受する、したがって、民衆に働くことを教えるつもりでいて民衆の労働で暮らしている、偶然に集めた人々がいとも集まっているコミューンではなかった。

それは、子供の時から労働に慣れた、他人のうちでも自分自身のうちでも労働を尊重しうる、農民たちの真の勤勉なコミューンであった。農民たちはそこで、まず毎日のパンを確保するために働いた。さらに、各自はそこに、彼らが必要とする、精神的、物質的な支えを見出した。友愛と平等の原則は、コミューンの中で徹底的に維持された。すべての人々、男も女も子供も、そこでは、その力の範囲で働かねばならなかった。組織上の職務は、一人ないし二人の同志に委任されたが、彼らは、それを終えると、コミューンの他のメンバーたちと並んで、日常の仕事に戻った。これらの健全な真面目な特色は、コミューンが勤勉な環境の中に生まれたこと、その発展は自然な経路をたどったこと、に負うていることは明らかである。

しかしながら、自由な共産主義のこれらの芽は、農民たちの、創造的な、建設的な、経済的な、社会的なあらゆる活動を代表している、というにはほど遠かった。反対に、これらの芽は、政治的な環境が、農民たちに、大規模な即時の共同の努力、全般的な緊張と活動とを要求していた時に当たって、ゆっくりと、段階的にしか、現われなかった。あれこれの村という範囲のみならず、解放された地方の一部をなす地区ないし県（管区）の範囲でもまた、統一した組織に到達するのは、不可避免的なことであった。地方全体に関するさまざまな問題の解決策を共同で見出す必要があった。連絡機関を設置しなければならなかった。農民たちは、それを欠いていた。その機関、それは、農民・労働者・バルチザンの地方諸会議であった。この地方が自由であった時期の間に、そうした会議が三回行なわれた。農民たちはそこで、緊密に結び合うこと、進むべき方向を見出すこと、彼らが直面している経済的、政治的任務を決定すること、に成功した。

……社会的自己指導の機関に関するものについては、農民たちと労働者たちは、自由労働ソヴェトの思想の信奉者であった。ポリシエヴィキや他の社会主義者の政治的ソヴェトとは反対に、農民と労働者の自由ソヴェトは、彼らの経済的社会的な「自己統治」の機関でなければならなかった。各ソヴェトは、その地区の労働者とその組織の意志の執行者でしかなかった。地区ソヴェト

は、経済的、地域的なずっつと広汎な組織を形成しつつ、それらの間に、必要な連携を設定したのである。しかしながら、戦時の環境は、それらの機関の創設と機能をきわめて難しいものとした。それが、それらの完全な組織化が、見事な成果にまで決して到達しなかった理由である。

赤軍に（一九一九年初め）統合された マフノーの反乱軍

一九一九年の初め、マフノー派の反乱者たちは、一連の闘争ののち、デニキン軍をアゾフ海の方に追いやり、彼らから約百車両の妻を奪った。マフノーと、反乱軍の参謀部の第一の考えは、この戦利品の食糧をモスクワとペトログラードの飢えた労働者たちに送ること、であった。この考えは、広汎な反乱者大衆によって熱狂的に迎えられた。百車両の妻は、マフノー派の代表団を伴って、ペトログラードとモスクワに引き渡された。代表団は、モスクワのソヴエトから、きわめて熱烈に受け入れられた。

ポリシェヴィキたちは、デニキンよりもずっと遅れて、マフノー運動の地方にやってきた。マフノー派の反乱者たちがデニキンと闘ったのは、すでに三カ月前のことであった。ドゥイベンコを長としたポリシェヴィキの第一師団が、シネルニコヴォに到着した時は、彼ら

は、すでにデニキンを彼らの地方から追い払い、マリウポリの東に防衛線を設置していた。

マフノー自身が、革命的な反乱運動全体と同様に、この時にはまだポリシェヴィキにとって未知のものであった。モスクワと地方の共産党の新聞の中で、マフノーはそれまで、非常に将来性のある大胆な反乱者として語られていた。彼の、スコロパドスキーに対する、ついでペトリウーラとデニキンに対する闘争のために、ポリシェヴィキ指導者たちは、あらかじめ彼に好意を抱いていた。彼らには、ウクライナにおけるさまざまな多くの反革命と闘ったマフノー派の革命的分遣隊は、赤軍に統合されるであろうと、疑いもなく思われたのである。したがって彼らは、現場での彼と知り合いになることなく、あらかじめ、マフノーをほめそやし、彼らの新聞の中で、彼に全ページをささげていた。

ポリシェヴィキの兵士たちとマフノーとの最初の会見は、（一九一九年三月に）好意と讃辭とにやはり助けられて行なわれた。マフノーは、全力を統一してデニキンに打ち勝つために、彼のすべての部隊を赤軍に合流させるよう、ただちに依頼された。革命的な反乱の政治的、イデオロギー的特殊性はごく自然なものと思われ、共同の利害にもとづく統一への、何らの障害にもならなかった。その特殊性は、侵してはならないものとして残ることとなった。

われわれは、マフノー運動の指導者たちが、ポリシェ

ヴィキたちが単に思想上の敵対者であることを願いがら、間違いを犯したことを、のちにみるようになる。彼らは、彼らがこの上ない権威主義的暴力の信奉者、国家主義者たちを相手にしていることを考慮していなかった。犯した誤ちは、それが危険にまで導かないならば、有益なものである。それは、マフノー派に対してよい教訓となった。

反乱軍は、次の条件の下で、赤軍を構成する一部となった。

- (a) 反乱軍は、以前のその内部的秩序を守る。
- (b) 反乱軍は、共産党当局の任命する政治委員を受け入れる。
- (c) 反乱軍は、厳密な意味での軍事作戦に関してのみ、赤軍の最高指令にしたがう。
- (d) 反乱軍は、デニキン戦線から移されることはありえない。
- (e) 反乱軍は、赤軍と同等に軍需品と糧食を与えられる。
- (f) 反乱軍は、反乱革命軍というその名称を維持し、その黒旗を守る。

マフノー派反乱者の軍隊は、三つの基本的原則にもとづいて組織されていた。すなわち、志願兵制、選挙の原則、自律、である。

志願兵制は、軍が進んで熱意をもってそこに入る革命戦闘員によってしか構成されないこと、を意味する。

選挙の原則は、軍のあらゆる部分の指揮官、参謀部および軍事評議会のメンバー、また一般に軍の中で重要なポストを占めるすべての人々は、それぞれの部分の反乱者たちによって、あるいは、軍全体によって、選挙されるか承認されねばならないこと、からなっている。

自律は、軍律のすべての規則が、反乱者たちの委員会で練られ、ついで軍の各部門の総会によって有効と認められ、各反乱者、各指揮官の責任の下で厳格に守られたこと、を意味する。

これらすべての原則は、赤軍との合体まで、マフノー軍によって維持された。それは、まず「第三旅団」の名を受けた。ついで「ウクライナ反乱革命第一師団」の名に変わった。のちにそれは、「（マフノー派）ウクライナ反乱革命軍」という、決定的な名を採用した。

《反革命的》？

——ドゥイベンコ（ポリシェヴィキ軍指揮官）への回答（一九一九年四月）

「同志」ドゥイベンコは、一九一九年四月十日に、グライ・イー・ポレで招集された大会を反革命的であると宣告し、あなたによれば、最も厳しい抑圧的な措置を適用しなければならぬ、その組織者たちの法律上の権利を剝奪した。われわれはここに、あなたの電報を、一語一語、公表する。「ノーヴォ・アレクセイエフカより、二

八三号、十日、二十二時四十五分。アレクサンドロフスク師団参謀部、同志ちゃん・マフノーに転送すること。写しをヴォルノヴァーカ、マリユポリ、同志マフノーに転送すること。写しをグリヤイ・ポーレのソヴェトに。私の命令によって解消された、軍事革命参謀部名の下に招集されるすべての大会は、明らかに反革命的と見なされ、その組織者たちは、法律上の権利剥奪宣告にいたる、最も厳しい抑圧的な措置に服することとなる。私は、似たようなことがもはや行なわれないための措置をただちに取ることを命ずる。——師団司令官ドゥイベンコ

大会を反革命的であると宣告する前に、「同志」ドゥイベンコは、実際には大会は軍事革命評議会の執行委員会によって招集されたのに、この大会がいかなる名の下に、いかなる目的で、グリヤイ・ポーレの「解消された」軍事革命参謀部によって招集されたかを、問い合わせるのを惜しんだ。したがって、大会を招集した軍事革命評議会は、自分が「同志」ドゥイベンコによって法律上の権利を剥奪されていると見なされたのかどうか、知らなかった。

事情がそういうことなら、われわれが、閣下に、誰によって、いかなる目的で（あなたの意見では明らかに反革命的な）この大会が招集されたかを、あなたにお知らせすることを許されたい。そしてそれは、あなたがのべてみせたほど、おそらくもはやあなたには恐ろしいもの

とは思われますまい。

大会は、すでにのべたように、グリヤイ・ポーレ地方軍事評議会の執行委員会によって（この地方の中央にある村である）グリヤイ・ポーレに招集された。それは、グリヤイ・ポーレ地方第三回大会と指定されている目的で招集された（同志）ドゥイベンコ、あなたは、「反革命的な」この大会がすでに三回行なわれたことをご存知だ。しかし、疑問はある。すなわち、地方軍事革命評議会は、どこから生じ、何のために生まれたのか？もしあなたがそれをまだご存知ないなら、「同志」ドゥイベンコよ、われわれはあなたにそれを教えよう。

地方軍事革命評議会は、今年の二月十二日にグリヤイ・ポーレで行なわれた第二回大会の決議にしたがって結成された。（それはかなり前のことで、あなたはそこにいらなかった）

その時、評議会は、戦闘員たちを組織し、自発的な動員を実施するために結成された。なぜなら、この地方は白軍によって包囲されており、第一次の志願兵たちからなる反乱軍部隊では、拡大する戦線を維持するにはもはや十分ではなかったからである。その時、われわれの地方に、ソヴェト軍はいなかった。以来、住民は、その多大の援助を期待しなかった。自分たちの地方の防衛は自分たち自身の義務と見なしていたのである。その目的でグリヤイ・ポーレ地方軍事革命評議会は結成され、こ

の評議会は、第二回大会の決議にしたがって、各地区一代表によって構成され、三十二人のメンバーが、エカチエリノスラフとタウリダの両県の各地区を代表していた。

しかし、われわれは、もつとあとで軍事革命評議会について説明するであろう。ここに問題がある。すなわち、第二回地方大会はどこから生じたのか、誰がそれを招集したのか、誰がその許可を与えたのか、それを招集したものは法律上の権利を剥奪されたのか、そうでないとするれば、なぜそうではないのか？ 第二回地方大会は、第一回大会によって選出された五人からなる、発意委員会によってグリヤイ・ポーレに招集された。第二回大会は今年の二月十二日に行なわれた。そして、まことに驚くべきことには、それを招集した人々は、法律上の権利を剥奪されなかった。なぜなら、当時はまだ、彼ら自身の血によって獲得された、民衆の権利をあえて侵害する、「英雄たち」がいなかったからである。ここで、新しい疑問が提起される。すなわち、第一回地方大会はどこから生じたのか、誰がそれを招集したのか、それを招集したものは法律上の権利を剥奪されたのか、そうでないとするれば、なぜそうではないのか？ 「同志」ドゥイベンコよ、あなたは、われわれの見るところでは、ウクライナの革命運動の中では、まことにまだ新参者だ。われわれは、その初期をあなたに教える必要がある。あな

たは、それを知ったのちに、おそらくあなたの行ないをいくらか改められることであらう。

第一回地方大会は、今年の一月二十三日に、グラン・ミハイロフカの反乱軍第一野営地で行なわれた。それは、戦線近くにある各地区の代表によって構成されていた。ソヴェト軍は、当時遠くに、ずっと遠くにいた。この地方は、全世界から切り離されていた、一方では、デニキン軍によって、他方では、ペトリウーラ軍によって。当時、それら両者に続けざまに打撃を与えたのは、先頭に立った、ちゃん・マフノーとストチュースを伴った、反乱軍部隊でしかなかった。村々における社会的な組織者と制度は、当時、つねに同じ名称を持っていたわけではなかった。ある村では、それは「ソヴェト」であり、他の村では「民衆摂政」であり、第三のところでは「軍事革命参謀部」であり、第四のところでは「地方摂政」等々、であった。しかし、その精神はどこでも同様に革命的であった。戦線を強化するためとともに、この地方全体での組織と行動とのいくらかの一貫性を生みだすために、第一回大会が行なわれた。

誰もそれを招集しなかった。それは、必要にもついで、民衆の同意をもって、自発的に集まったものであった。大会では、強制的に動員されたわれわれの兄弟を、ペトリウーラ軍から取り戻すことが提案された。その目的のために、五人からなる代表団が選出され、それは、われわれの兄弟たちに、彼らは間違っている、彼らはそ

の軍を離れなければならないと告げるために、ちゃん・マフノの参謀部ともう一つの必要なところに立ち寄り、(ベトリウーラが代表する)ウクライナ執政官政府軍の中に侵入する指示を受けた。さらに、代表団は、反革命の徒党から解放された地方全体を組織するために、そしてより強力な防衛戦線を作りだすために、帰った時により広汎な第二回大会を招集することを委任されていた。

代表たちは、したがって、彼らが帰った時、すべての「党」、すべての「権力」、すべての「法」の外で、第二回地方大会を招集した。なぜなら、「同志」ドゥイベンコ、同種の法の愛好家であり番人であるあなたやほかの人々、あなた方はずっと遠くにいたからだし、そしてまた、反乱運動の英雄的な指導者たちは、自分たち自身の手で隷属の鎖を断ち切ったばかりの民衆に対する権力を、望んではいなかったからである。大会は、反革命と宣告もされなかったし、それを招集した人々は、法律上の権利剥奪を宣告もされなかった。

地方評議会に戻ろう。グリヤイ・ボーレ地方軍事革命評議会が設立されたその時、ソヴェト権力は、この地方に現われた。第二回大会で可決された決議にしたがって、地方評議会は、ソヴェト権力出現にあたって、未解決の仕事を残しておかなかった。それは、踏みはずすことなく、大会の指示を実施しなければならなかった。評議会は、命令の機関ではなくて、執行の機関であ

った。それは、その力の範囲で仕事をつづけた。それは、革命的路線の中で、その仕事を追求した。徐々に、ソヴェト権力は、評議会の活動を妨害しはじめた。ソヴェト政府の人民委員たちとその他の高級官僚たちは、評議会を反革命組織と見なし始めた。そうした時に、評議会のメンバーは、評議会の今後の運営方針を決定するために、あるいはもし大会が必要と判断するならそれを解散するために、四月十日にグリヤイ・ボーレでの第三回地方大会を招集したのであった。

そこに来たのは、反革命の人々ではない。そうではなく、ウクライナにおいて、初めて反乱の旗、社会革命の旗をかかげた人々であった。彼らは、すべての抑圧者に対する全般的な闘争の中で協力の実現を助けるために、そこに来たのである。異なる管区と県の七十二の郡の代表者たちと多くの軍事単位の代表者たちが大会に到着した。彼らすべては、グリヤイ・ボーレの地方軍事革命評議会が必要である、と考えていた。彼らは、その執行委員会を補足的に新設し、執行委員会に、この地方で、平等な自発的な動員を実施することを委任した。大会は、この地方が初めて反乱の旗をかかげたにもかかわらず、「反革命的な」大会であると宣告した、「同志」ドゥイベンコの電報によってひどく驚かされた。そのため、大会はその電報に対する激しい抗議を可決した。

そうしたものが、「同志」ドゥイベンコよ、あなたが眼を見開いて見なければならぬ、一連のものである。

思い直せ！ 反省せよ！ あなたには、あなただけに

は、彼ら自身、そのタコのできた手で、隷属の鎖を断ち切り、今、自分たちの流儀で、自分たちの生活を築いている、百万の労働者大衆を、反革命と宣告する権利があるのか。

否だ！ もしあなたが本当に革命的ならば、抑圧者に対する闘いの中で、新しい自由な生活の建設という仕事の中で、あなたは民衆を助けなければならない。

法律上の権利を剥奪された人々よりも民衆をずっと革命的にすることを可能とする、革命的と自称するいくらかの人々によって作られた法が存在しうるであろうか？ (なぜなら、評議会の執行委員会は全人民大衆を代表しているからである)

すべての法学者、すべての法を投げ捨てたばかりの民衆を隷属させることとなる、暴力による法を定めて来ることが許されるか、それは理にかなったことであろうか？

ある革命家に、彼がその擁護者だと称している革命的民衆に対して、最も厳しい懲罰を適用する権利を持たせる、そんな法があるであろうか？ というのも、問題の大衆は、許可を待つこともなく、その革命家が民衆に約束した望ましいもの、つまり、自由と平等とを手中にしたという単純な事実があるからである。

革命的人民大衆は、ある革命家が民衆が獲得したばかりの自由を民衆から取り上げる時、黙っていられるであ

ろうか？

革命の法は、ある代表を、彼が彼を選出した革命的民衆によって与えられた委任を実行しなければならぬと考えていたという理由で、銃殺することを命ずるのか？ 革命家は、どんな利益を擁護しなければならぬのか？ 党の利益か、それとも、その血によって革命を動かしている、民衆の利益か？

グリヤイ・ボーレ地方軍事革命評議会は、諸政党への従属とその影響の外に在る。それは、それを選出した民衆しか認めない。その義務は、民衆がそれに委託したことを達成することであり、いかなる左翼社会主義の党にも、その思想を宣伝することを妨害しないことである。したがって、ある日、ポリシェヴィキ思想が労働者たちの間で成功を収めるとすれば、軍事革命評議会、ポリシェヴィキの観点から見れば明らかに反革命的なこの組織は、「より」革命的な、ポリシェヴィキ的な、別の組織によってかわられるであろう。しかし、それまでは、われわれの邪魔をするな、われわれを庄殺しようとするな。

「同志」ドゥイベンコよ、あなたとあなたの同類が、以前と同じ政策をつづけるなら、あなた方がそれをよいくとであり良心的なことだと思ふのなら、それならあなた方の汚いくだらぬことを最後までやりたまえ。地方大会の発意者たちすべてと、あなたやあなたの党、あなたがクルルスクにいた時、大会に招集された人々からも、

法律上の権利を剝奪したまへ。ウクライナにおいて、初めて反乱と社会革命の旗をかかげた、あなた方の許可なくいたるところで行動した、あなた方の綱領に文字通りにしたがうことなく、もっと左に寄っていた人々すべてを、反革命的であると宣告したまへ。あなたが反革命的であると宣告した諸大会に代表を送った、すべての人々からも、法律上の権利を剝奪したまへ。最後にあなた方の許可なく、すべての働く民衆の解放のために反乱運動に参加した、亡くなった戦闘員すべての法的権利剝奪を宣告したまへ。あなた方の許可なく参集したすべての大会を、非合法で反革命的であるとつねに宣告したまへ。しかし、真実が結局は力に勝つことをよく知っておきたまへ。評議会は、あなた方のあらゆる威嚇にもかかわらず、委任された義務を放棄はしないであろう。なぜなら、評議会はその権利を持たないし、民衆の諸権利を横領する権利もまた持たないからである。

グリヤーイ・ポーレ地方軍事革命評議会
(以下に署名が並んでいる)

トロツキーと「マフノ」運動

(一九一九年五月三十一日—六月四日)

レオン・トロツキーという大革命家の思い出にささげねばならないあらゆる尊敬にもかかわらず、彼の驚くべき政治的軍事的生涯のうちで、ここにある痛ましいエピソードを、黙って

看過することはできない。真実のみが革命である。

ポリシェヴィキたちの反マフノ運動の宣伝は、さらにひどいものとなった。

その組織的活動の範を示したものは、この間にウクライナに到達した、トロツキーであった。彼によれば、反乱運動は、この地方に権力を樹立しようとする富農たち(「クラーク」)の運動にほかならなかった。労働者たちの絶対自由主義的コミューンについてのマフノ派とアナキストたちのあらゆる議論は、戦略でしかなく、実際には、マフノ派とアナキストたちは、要するに豊かなクラークたちの権力となる、彼ら自身のアナキスト権力を樹立することを熱望しているのである(新聞「途上」五一号、トロツキーの記事「マフノ」運動)。

承知の上での嘘のこの扇動活動と同時に、反乱した地方の監視、もっと適切に言えば、包囲は、極端にまで進められた。ロシアの遙かな地点の、モスクワの、ペトログラードの、イワノヴォ・ヴォズネセンスクの、ヴォルガの、ウラルの、シベリアの、共感によってこの独立した誇り高い地方に惹き寄せられた革命的労働者たちが、そこに侵入するにいたるには、この上ない大きな困難をくぐらねばならなかった。

糧食、弾薬、毎日戦線で消費される欠くことのできないその他の必需品の補給は、完全に止まった。……そして、状況は破局的となった。それは、デニキンの軍隊

が、クバンのコサック隊とカフカズで結成された部隊の到達によって、問題の戦区で著しい増援を受けた、その時期に当たっていた。

ポリシェヴィキたちは、彼らがしていること、彼らの方針がウクライナにおけるすでにかくも複雑な状況にもたらす結果を、理解していたであろうか？

確かに、彼らは自分たちの行為を完全に理解していたのである。彼らは、この地方の軍事力を破壊し全滅させるために、包囲の戦術をとっていたのである。当然のことながら、武装解除された敵と闘うことはずっとたやすい。すべてに必要な貯蔵品を持つ同じ反乱者たちよりも、糧食を欠き、デニキンの戦線の重圧を受けている反乱者たちをしたがわせることは、ずっと容易である。

しかし、同時に、ポリシェヴィキたちは、ドネツ地方全体の全般的状況を少しも理解してはいなかった。彼らは、デニキンが処理している戦線や部隊について、いかなる知識も持っていなかった。彼らは、彼の当面の計画も知らなかった。しかしながら、重大な軍事的な思いがけない出来事が、カフカズでは、ドンとクバンの両地方では、革命に反対する全般的な作戦のために、起き、よく知られ、組織されていたのである。

グリヤーイ・ポーレ地方によって、四カ月にわたって、かつて確保されていた頑強な抵抗は、デニキン軍が彼らの攻勢を北ロシアに向かって大きく発展させることを妨げていた。なぜなら、グリヤーイ・ポーレの反乱者

たちは、彼らの左翼にとって絶え間ない危険となっていたからである。

……白軍が、マフノ派にとってすら意外な、並みはずれた規模で一九一九年五月に始められた第二の作戦を準備したのは、それだけにますます多くの精力を要したことであった。ポリシェヴィキたちは、このことについて何一つ知らなかった。あるいはむしろ、彼らはそれについて何一つ知ることを望まず、マフノ運動に対して統行すべき闘いに注意を奪われていたのである。

そんなふうにして、自由な地方とそれを伴ったウクライナ全体は、同時に二つの面から脅かされていた。その時に当たって、グリヤーイ・ポーレの軍事革命評議会は、状況の重大さを予想し、多くの地方の、特に、エカチェリノスラフ、ハリコフ、タウリダ、ヘルソン、ドネツの各県の、農民、労働者、バルチザン、赤軍兵士の臨時大会を招集することを決定した。この大会は、デニキンの反革命軍と、それに備えるために何も企てられないソヴェト当局の無能によって代表される、致命的な危険にかんがみて、全般的な状況を理解しなければならなかった。この大会はこの事態に処するために、労働者たちによってとられるべき当面の任務と実際的な措置を、決定しなければならなかった。

この点について、軍事革命評議会によってウクライナの労働者たちに向けられた、アップビルの文書は次の通りである。

農民・労働者・バルチザン代表の第四回
臨時大会召集状(電報四一六号)

エカチェリノスラフとタウリダの両県の、そして、近隣の地方の、管区、郡、コミューン、村の、すべての執行委員会に。いわゆるちゃん・マフノーの、ウクライナ反乱第一師団のすべての隊に。同じ地方にいる赤軍のすべての部隊に。すべて、すべて、すべてのものに。

五月三十日の会議で、軍事革命評議会の執行委員会は、白軍部隊の攻撃によって定められた戦線の状況を検討し、ソヴェト権力の政治的・経済的な全般の状況を考慮し、何人かの人あるいは諸政党ではなく、勤労大衆自身のみが、そこで解決策を見出さう、との結論に達した。それゆえ、グリヤイー・ポーレ地方軍事革命評議会執行委員会は、六月十五日、グリヤイー・ポーレでの、臨時大会を招集することを決定した。

選出方法。1 農民と労働者は住民三千人について一代表を選ぶ。2 反乱者と赤軍兵士は、一軍単位(連隊、師団、等々)ごとに、代表者を派遣する。3 参謀部。ちゃん・マフノーのそれは、二代表。各旅団のそれは、旅団ごとに一代表。4 管区の執行委員会は、分派ごとに一代表(党派の代表)を送る。5 各管区内の各党の組織——「ソヴェト」制度の基礎を認める組織——は、組織ごとに一代表を送る。

注意事項。(a) 働く労働者と農民の代表の選出は、村

の、郡の、製造所ないし工場の総会で行なわれる。(b) ソヴェトないしその委員会のメンバーから切り離された集会は、代表選出を行なうことができない。(c) 軍事革命評議会は、必要な通貨を準備できないので、各代表は現地での食糧と金を用意しなくてはならない。

議事日程。(a) 軍事革命評議会執行委員会の報告、各代表の報告。(b) 現状。(c) グリヤイー・ポーレ地方の農民・労働者・バルチザン・赤軍兵士代表の再編制。(d) 的、役割、任務。(e) 地方軍事革命評議会の再編制。(f) この地方の軍事的調整。(g) 補給問題。(h) 農業問題。(i) 財政問題。(j) 勤労農民と労働者の同盟。(k) 治安問題。(l) この地方での裁判執行の問題。(m) 進行中の諸問題。

署名——軍事革命評議会執行委員会
グリヤイー・ポーレにて、一九一九年五月三十一日

このアッピールが発せられるとすぐ、ポリシェヴィキたちは、型通りに軍事作戦を開始した。……反乱者たちの部隊が死を賭して進み、デニキンのコサック兵の猛烈な突撃に抵抗していた時、多くの連隊の先頭に立ったポリシェヴィキたちは、反乱した地方の、北の側、つまり背後の、村々に侵入していた。そこで、彼らは、活動家たちを襲い、その場で死刑に処し、この地方に作られていたコミューンないし類似の組織を破壊した。この侵入の決定通牒がこの時ウクライナに来ていたトロツキーに

よって与えられたことは、疑いないことである。際限なく無造作に、トロツキーはマフノー運動を「清算」し始めた。

まず、彼は、グリヤイー・ポーレの軍事革命評議会のアッピールへの回答として、次の命令を発表した。

共和国軍事革命評議会命令一八二四号、一九一九年六月四日、ハリコフ

アレクサンドロフスク、マリユポリ、ベルジャンスク、バクムート、パヴログラード、ヘルソンの各管区的全軍事委員と全執行委員会に。

マフノーの旅団参謀部と協力して、グリヤイー・ポーレの執行委員会は、アレクサンドロフスク、マリユポリ、ベルジャンスク、メリトポリ、バクムート、パヴログラードの各管区、ソヴェトと反乱者の大会を、今月の十五日に招集しようとしている。前記の大会は、ウクライナにおけるソヴェト権力と、マフノーの旅団が属している南部戦線の組織に、完全に敵対している。この大会は、……マフノーの旅団が、その無能力と犯罪的傾向とその指導者たちの裏切りのために、絶えず後ろを見せることしかしていない白軍に、戦線を引き渡すこと以外の結果を持つことはできない。

1 前記大会を組織することを禁止する。それは、いかなる場合にも行なわれないであろう。

2 すべての農民・労働者大衆に、前記大会への参加

はソヴェト共和国と戦線に対する、高度の裏切り行為と見なされることを、口頭や文書によって、通達しなければならぬ。

3 前記大会のすべての代表は、直ちに逮捕され、ウクライナ第十四(旧第二)軍の革命軍事法廷に召喚されねばならない。

4 マフノーとグリヤイー・ポーレ執行委員会のアッピールを流布したものは、逮捕されねばならない。

5 この命令は、電信を通じて、法的効力を持ち、いたるところで広く布告され、あらゆる公共の場所に貼り出され、郡と村の執行委員会の代表と、ソヴェト当局のあらゆる代表に、軍の各単位の指揮官と人民委員に、送付されなければならない。

共和国軍事革命評議会議長トロツキー
(ほかの署名がつづいている)

なほどこかの注意をもって問題を検討してみることをすることなく、いつもの解釈の仕方をとったトロツキーは、マフノーを、グリヤイー・ポーレで起こっているすべてのこと、この地方のあらゆる革命的傾向に責任のある、張本人と見なした。彼は、大会は、マフノーの旅団参謀部によってではなく、さらにまたグリヤイー・ポーレの執行委員会によってでもなく、それら双方から完全に独立した機関、すなわち地方軍事革命評議会によって招集されたことに、注意してみることにすら無視した。

意味深い事実。彼の命令一八二四号の中で、トロツキーはすでに、彼が「白軍に絶えず後ろを見させている」といつている。マフノー派の指導者の裏切りをほめかしている。それから数日して、彼とあらゆる共産党の新聞は、デニキン軍への戦線のいわゆる開け渡しについて、もっとひどいことをいつている。

……この戦線は、反乱した農民たち自身の努力と犠牲によってのみ、形成されていた。この戦線は、彼らの叙事詩の特に英雄的な時期に、この地方があらゆる種類の権力から解放された時に、起源を発している。それは、南東に、獲得した自由を守る、勇敢な哨戒線を敷いた。六カ月以上にもわたって、革命的反乱者たちは、君主制派の反革命の最も頑強な流れの一つに、この方面での防壁を対置していたのである。彼らは、全面的な攻勢を開始した反革命に抵抗しつつ、彼らの中の何千という最良のものたちを犠牲にし、この地方のあらゆる手段を用い、彼らの自由を徹底的に防衛しようと決意していた。われわれが先に引用したトロツキーの命令は、ソヴェト当局によって、マフノー派の参謀部には伝えられず、参謀部は、偶然に、二日か三日のうちに、やっとそれを知った。マフノーは、それに即座に電信を通じて答え、発生した、ばかげた、奇怪な状況にかんがみて、司令官のポストを離れるつもりであることを通告した。残念ながら、この電報の原文をわれわれは持っていないのだが。すでにのべられたように、トロツキーの命令は、電信

によって法的効力を得た。ポリシエヴィキたちは、軍、事、力、であらゆる地点でそれを執行し始めた。グリヤーイ・ポーレ地方軍事革命評議会によって発せられたアツピールについて協議していた、アレクサンドロフスクの工場労働者の諸集会は、軍によって解散させられ、違反者は死刑に処するとして禁止された。農民たちについていえば、彼らはごく簡単に銃殺と絞首刑でおどかされた。この地方のさまざまな場所で、たくさんの人々、コースチン、ボルニン、ドブロニューボフ、等々がとらえられ、評議会のアツピールを流布したとの嫌疑をかけられ、無造作に処刑された。

命令一八二四号以外にも、トロツキーは、赤軍の各部隊にあてて多くのほかの命令を発し、マフノー運動をその根源において破壊するよう赤軍にうながした。さらに彼は、マフノーを、参謀部のメンバーを、運動の文化面を担当していた平和的な活動家をも、ぜひともとらえること、彼らを軍法会議に引き渡すこと、つまり彼らを処刑することを厳命する、秘密命令をだしていた。

マフノー、身を退くと申し出る

(一九一九年六月六―九日)

マフノーは、ポリシエヴィキたちがグリシノ方面の戦線から撤退したこと、彼らはそうしてデニキン軍がこの北東の側面からグリヤーイ・ポーレ地方に自由に近づけ

るようになったこと、を参謀部と評議会に知らせた。そして、事実、コサック騎兵の群れが、反乱軍の戦線の側からではなく、赤軍が配置されていた左翼から、この地方に侵入してきた。その結果、マリユポリ・クレーティニコヴオ・タガンロークの戦線を守っていたマフノー軍は、デニキン軍によって敗走させられた。デニキン軍は、法外な兵力をもってこの地方の中心部を侵略した。

……全地方の農民たちは、デニキン軍の全面攻勢を十分に予期していた。したがって、それに備えていたし、志願兵部隊の招集によってそれを防ぐことを決意していた。四月以来、多くの村の農民たちは、グリヤーイ・ポーレに多くの新手の戦闘員を送った。しかし、彼らには武器と糧食が欠けていた。戦線にいた古くからの部隊にも、もはや糧食がなく、ただそれを手に入れるだけの目的で、白軍に対して攻撃を企てた。反乱者たちに軍事的な補給をすることを取り決めた協定によって拘束されていたポリシエヴィキたちは、四月以来、彼らの仕事をサポーター・ジュシ、包囲を始めた。それゆえ、新しい志願兵の到着にもかかわらず、直ちに新しい部隊を編制するのは不可能であった。そして、その結果はすぐに予想された。

たった一日のうちに、グリヤーイ・ポーレの農民たちは、彼らの村を救おうとして、一連隊を編制した。彼らは、そのために、原始的な道具、斧、槍、古い騎兵銃、獵銃、等々によって武装しなければならなかった。彼ら

は、コサック兵と遭遇するために行軍し始め、その進撃を阻もうとした。スヴィアトドゥコフカ村の近く、グリヤーイ・ポーレから、約十五キロのところ、彼らは、ドンとクバンのコサック騎兵の有力な部隊と衝突した。彼らは、コサック騎兵と、激烈な、英雄的な、戦闘を開始し、多数の戦死者をだした。その間に、彼らのほとんどは、指揮官、グリヤーイ・ポーレ生まれの、ベトログラードにあるブチロフ工場の労働者、B・ヴェレテルニコフともども、倒れた。そして、コサック騎兵は、文字通りグリヤーイ・ポーレに殺到し、一九一九年六月六日、それを占領した。マフノーは、軍の参謀部と部隊とともに、一撃しか与えず、村から約七キロ離れているグリヤーイ・ポーレ駅まで退却した。しかし、夕方頃、彼は、駅をも放棄しなければならぬことを認めた。まだ自由にすることのできるすべての兵力を組織したマフノーは、翌日、グリヤーイ・ポーレに攻撃をかけることに成功し、敵をそこから撤退させるにいたった。しかし、彼はごくわずかの時間しか村の主人としてとどまらなかった。コサック騎兵の新しい波が、改めて村を放棄することを彼に強いたのである。

ポリシエヴィキたちは、マフノー派に敵対する多くの命令をすでに与えていたにもかかわらず、初めのうちは、何事もなかったかのように、よい顔を見せつけていたことは、注目すべきことである。それは、運動の指導者たちを確実に捕えようとするための策略であった。

六月七日、彼らは、マフノーに装甲列車を送った。そして彼に最後の最後まで抵抗することを求め、ほかの援兵を送ることを約束した。事実、赤軍の若干の分遣隊が、二日後に、チャブリーノの側から、グリーヤイ・ポールから二十キロ離れているガイシュールの駅にやってきた。彼らとともに、軍の人民委員、メエラウク、ウオロシロフ、その他も到着した。

赤軍の司令部と反乱者たちの間の協約が結ばれた。二つの陣営の一種の共同の参謀部が設置された。メエラウクとウオロシロフは、マフノーとともに同じ装甲列車の中にいた。彼らは、協力して、軍事作戦を指揮した。しかし、同時に、ウオロシロフは、トロツキーの署名した命令を手中にしていた。それは彼に、マフノーと、マフノー運動のそのほかの責任ある指導者を捕えること、反乱者たちの部隊を武装解除すること、何らかの抵抗を試みるものは容赦なく銃殺すること、を命じていた。ウオロシロフは、その使命を実施するのに好都合な時期のみを待っていた。マフノーは、直ちに警告を受け、彼のこれからなすべきことを理解した。彼は、計画されているような状況を考慮した。彼は、血なまぐさい出来事が日増しにくりひろげられることとなる、と考えた。そして、満足しうる解決策を探した。彼は、最良の手段は、彼が反乱軍の戦線の司令官のポストを離れることであろう、と思った。彼はそれを反乱軍の参謀部に告げ、単なる参加者として戦列の中で仕事をする方が現在

ではずっと有効だ、と付け加えていった。それが彼のしたことである。彼は、文書にした弁明書をソヴェト最高司令部に提出した。それは、次のとおりのものであった。

第十四軍参謀部、ウオロシロフ。——ハ
リコフ、軍事革命評議会議長トロツキー。
——モスクワ、レーニン、カーメネフ。

共和国軍事革命評議会命令一八二四号にかんがみて、私は、第二軍参謀部とトロツキーにあてて、私が現在占めているポストを免除してくれるよう懇請した電報を送った。今、私は私の申立てをくり返す。私がそれを改めていなければならぬと考えている理由をのべることにする。私が、反乱者たちとともに、デニキンの白軍部隊とのみ戦い、自由と自衛行動への愛しか説かなかったにもかかわらず、あらゆるソヴェトの公的な新聞や、ボリシエヴィキ共産党の新聞は、私について、革命家にふさわしからざる噂を広めている。……「マフノー運動」(新聞「途上」五一号)と題する記事の中で、トロツキーは、問題を提起している。「マフノー派の反乱者たちは、誰に対して蜂起したのか?」そして彼は、その記事全体にわたって、マフノー運動が、事実上、ソヴェト権力に対する戦線以外の何ものでもない、と証明するのに専念している。彼は、反乱者たちが六カ月間も数えきれない

損失を蒙った、今もなお蒙っている、百キロ以上もの広がりを持つ有効な戦線については、一言もいっていない。命令一八二四号は、私をソヴェト共和国に対する陰謀者である、といっている……。

私は、労働者と農民が、彼らの個人的なことや全般的なことについて討議したり決定したりするために、彼ら自身で大会を招集することは、革命によって獲得された権利、労働者と農民の侵すべからざる権利と見なしている。それゆえ、中央当局によって行なわれたそうした大会を招集することの禁止、それを不法なものとする宣告(命令一八二四号)は、勤労大衆の権利の、直接の、傲慢な、侵犯である。

私は、私についての中央当局の態度を完全に理解している。私は、当局が、反乱運動全体を、自分らの国家主義的な行動と相容れないものであると見なしていることを、絶対に確信している。同時に、中央当局は、この運動が私個人と緊密に結びついていると信じている。そして当局は、反乱運動に対する自分たちのすべての恨みとすべての憎悪を私に与えている。トロツキーの書いた記事以上に、そのことを見事に証明できるものは何一つない。故意に中傷と嘘とを持ちだしながら、その中には、個人的に私に向けられた憎しみが示されているのである。

反乱運動に対する中央当局の、現に挑戦的となつてい

る両側に、特殊な内部戦線の設定を不可避免的に導いた。私は、この思いがけない出来事を、働く民衆に対する、許しがたい、非常に大きな犯罪と見なしている。そして私は、それを妨げるためになすすべてのことをするのが、私の義務であると信じている。当局がこの犯罪を犯すことを避ける最も確実な手段は、私の意見では、私が現に占めているポストから離れることにある。

そうすれば、革命的反乱者たちとともに私が、反ソヴェト的陰謀に荷担していると疑うことを止めて、当局は結局、ウクライナの反乱を、軍需物資を出すのをしづり、時にはごく簡単に補給をサボタージュさせた、これまででは不信に満ちたいかがわしい関係を保ってきた、敵対的な徒党としてではなく、誠実な革命的観点から見ても、大衆の社会革命の生き生きとした、積極的な表現と見なすことであろう、と私は思う。何のために、反乱者たちは、革命で獲得した領土や人員の無数の損失を、しばしば蒙ったのか? それは、もし中央当局が別の戦術を採用していたら、容易に避けることのできたものであった。私は、私の報告と私の所持品を受け取りに来ることを要求する。

ガイシュール駅にて、一九一九年六月
九日。——署名、ちゃん・マフノー。

農民と労働者の地方大会

(一九一九年十月二十日)

農民と労働者の地方大会が、一九一九年十月二十日、アレクサンドロフスクで行なわれた。二百人以上の代表がそれに参加し、うち農民が百八十人、労働者が三十人前後であった。大会は、軍事面での諸問題（デニキンに対する闘い、反乱軍とその補給の増大）についても、また民生上の組織にかかわるほかの諸問題についても討議をした。

大会の仕事は一週間近くもつづき、そこに参加した人の並々ならぬ情熱によって特徴づけられた。大会の環境もその雰囲気を生んだ大きな一因であった。第一に、勝利を得たマフノール軍の故郷であるこの地方への帰還が、農民大衆にとってこの上ない重要な出来事と映っていた。彼らのほとんどすべての家族の、一人ないし二人の縁者が反乱者たちの中にいたのである。

しかし、よりいっそう意義深いこと、それは、大会が、真の絶対的な自由の下に、結束していたことである。上から来るいかなる影響も、そこでは感じられなかった。そして、すべてを仕上げるために、大会は、農民たちにとっては実に驚いたことであったが、彼らの考えや彼らの願いの根底をいい表わす、アナキストである、ヴォーリンという、協力者であり優れた報告者を持つて

いた。現場での勤労大衆の要求と一致して活動する自由ソヴェトの思想、自分たちの労働の産物の相互交換にもとづく農民と労働者の関係、生活上の平等な絶対自由主義的な思想、ヴォーリンが彼の報告の中で詳述したこれらすべての主張は、農民大衆の考えを表現していた。彼らは、その方向とその形の下でしか、革命と、革命的創造的な仕事とを、理解しなかった。

諸政党の代表たちは、討論の第一日には、反目の感情を持ち込もうとした。しかし、彼らは大会全体によってたちまち非難され、以後、大会の仕事は、完全な満場一致によって展開された。

……まれにしか感じられないような真の自由の精神が、会場に満ちていた。人々がそのために全力をささげる、そして、そのために死するにすら価する、実際に偉大な事業を、各自は自分の前に見ていたし、理解していた。多くの年とった人々、老人すらもまじえていた農民たちは、それが、彼らが完全に自由であると感ずるのみならず、兄弟でもあると感ずる、最初の大会であった、自分たちはそれを決して忘れないであろう、といっている。事実、この大会に参加した誰かが、それをいつか忘れるということとは、ありそうもない。

ウクライナ反乱軍の宣言 1920/1/1

ウクライナのすべての農民と労働者へ！ 電報によって、電話によって、あるいは野戦郵便によって、ウクライナのすべての村々に伝達せよ！ 農民の集会で、工場、企業で、朗読せよ！

働く兄弟たちよ！

ウクライナの反乱軍は、ブルジョアジーによる、ポリシェヴィキ共産党の独裁による、労働者と農民の抑圧に對して立ち上がるために、結成された。反乱軍は、あれこれの専制の束縛からのウクライナ労働者の完全な解放のための、またわれわれのものである真の社会主義組織を創設するための闘いを、目的としている。マフノール派、バルザンの反乱軍は、その目的を達成するために、数多くの戦線で熱心に闘った。それは、現在、勝利のうちにデニキン軍との闘いを終え、専制と抑圧とが存在していたいたるところで、次々と地方を解放した。

多くの働く農民が自問してきた。どうすべきなのか？ 何をすることができ、何をしなければならないのか？ 権力の法とその組織の前で、いかに行動すべきなのか？ 等々。

これらの質問に対して、労働者・農民ウクライナ同盟は、ほどなく答えるであろう。同盟は、実際、ごく近々に集会を開き、すべての農民と労働者を招集しなければならない。農民と労働者が実現するであろう、彼らがわが農民と労働者の最も重要な諸問題を討議し解決するために参集する可能性があるであろう、その集会の正確な日付はまだ確定していない、という事実を考慮して、マフノール派軍は、次の宣言を公表することが有益であると考える。

1 デニキン政府のすべての処分は廃棄される……。農民と労働者の利益を妨げる、共産党政府のすべての処分もまた廃棄される。労働者たちが自分自身で、労働者の利益に支障となる共産党政府の処分とはどんなものかという、問題を解決しなければならないであろう。

2 修道院、大地主その他の敵に属していたすべての土地は、自分たちの腕による労働のみで暮らしている、農民の手中に移される。この譲渡は、集会の中で、農民の討議によって、決定されなければならない。農民たちは、自分たちの個人的な利益のみではなく、搾取者のくびきの下に抑圧されていた、働く民衆の共通の利益をも、想起し考慮しなければならないであろう。

3 工場、企業、炭鉱、その他の生産手段は、その運営と管理の責任を引き受ける、その発展を助長し、経験をもって推進する、国のすべての生産を唯一の組織の中に集めようとする、労働者階級全体の所有となる。

4 すべての農民とすべての労働者は、農民と労働者の自由な評議会を結成するよう、うながされている。これらの評議会においては、民衆の経済の有益な部門に積極的に参加する労働者と農民のみが選出されるであろう。政治的組織の代表は、労働者・農民評議会に参加することはできないであろう。なぜなら、それは、労働者たち自身の利益を害するものとなるであろうから。

5 自由な労働者の精神を妨げる、専制的な、軍隊化された組織の存在は認められない。

6 言論、出版、集会の自由は、各労働者の権利である。この自由に反対するどのような意志の表明も、反革命的な行為である。

7 警察の組織は、廃棄される。そのかわりに、労働者と農民によって結成されることとなる、自己防衛の組織が組織されよう。

8 労働者・農民評議会は、労働者の自己防衛を表現している。したがって、彼らの各自は、ブルジョアジーや軍人のどのような意志表明に対しても闘わなくてはならない。山賊行為と闘うこと、山賊と反革命者をその場で銃殺すること、は必要である。

9 ソヴェトとウクライナの二つの貨幣のそれぞれは、ともに同等に受け入れられなくてはならない。この意向に違反した者はすべて罰せられよう。

10 農民と労働者の組織によって管理されているもの以外ならつねに、労働の産物の、ないし贅沢品の商業上

の交換は、自由なものとして残される。そうした交換がすべての労働者の間で行なわれることが、要求される。

11 この宣言の普及に反対するすべての人は、反革命的であると見なされる。

(マフノー派)ウクライナ軍革命評議会

一九二〇年一月一日

綱領 = 宣言 1920/4

1 「マフノー派」とは誰か、彼らは何のために闘っているのか？

マフノー派は、ドイツの、ハンガリーの、オーストリアの、権力の暴虐に抗して、ウクライナのコサック首長の権力に抗して、すでに一九一八年以来、反乱している農民と労働者である。

マフノー派は、デニキンに対する、また、それがどこからきたものであるかと、抑圧と暴力と虚言のそれぞれの形態に対する、闘いの旗をかかげた労働者である。

マフノー派は、自分たちの全生活の辛苦で、一般にブルジョアジーを、今日では特にソヴェトを、富ませ繁栄させた、あの労働者たち自身である。

2 なぜ「マフノー派」と呼ばれるのか？

なぜなら、ウクライナにおける反動の、最も苦しい最も重大な日々の中で、われわれは、われわれの戦列のうちに、疲れを知らぬ友、コンドティエーレ・マフノーを持っていたからである。彼の声は全ウクライナを通じて

聞かれ、労働者に対して行使されるあらゆる暴力に抗議し、抑圧者、盗賊、横領者、労働者をだます政治屋的ベテン師に対する闘争を、みなに訴えていた。この声は、今日でもなおわれわれの間に、われわれの戦列の中に鳴り響いており、それは、最終的な目標のための、つまりいかなる抑圧からも労働者を解放するための闘いを変わずに訴えつつけている。

3 いかにしてその解放を獲得しようとしているのか？

君主的、共和的、社会民主主義的、共産主義的、ボリシェヴィキ的な連立政府を打倒しながら。そのかわりに、気ままな成文法を持つ政府ではない、労働者評議会が、自由な選挙の中で選出されなければならない。それが政府ではないというのは、ソヴェト制度は、権威主義的なものではない（今日ソヴェト権力を自任している社会民主主義者やボリシェヴィキ共産主義者と対立する）からである。それは、権威から独立した、労働者たちの社会生活の自由な組織によって表現される、反権威主義的な、反国家主義的な社会主義の、最も純粋な形態である。その社会生活の中では、孤立している、あるいは提携している、各労働者は、連帯と友愛と平等の原則にしたがって、まったく独立して、彼自身の幸福と彼自身の完全な安楽を築くことができるであろう。

4 《マフノー派》は、ソヴェト制度をどう解釈するのか？

労働者たち自身が、彼ら自身の評議会（ソヴェト）を選ばねばならず、それは、その同じ労働者たちの意志と命令を執行するものである。それは、したがって、権威ではなく、執行の評議会である。土地、工場、企業、鉱山、輸送、等々、民衆の財産は、働く労働者に属さなくてはならず、したがってそれらは、社会化されなければならない。

5 《マフノー派》を最終目標に導く手段とはどんなものか？

何を目指すものであれ、あらゆる虚構に対する、専横と暴力に対する、一貫した仮借ない革命的闘争、死を賭した闘争、自由な言論、正義にかなった行動、武器を手にした闘争。

ただ、各統治者、権威の各代表を抹殺しながら、政治的、経済的、国家主義的な各虚構を根底から破壊しながら、国家を社会革命によって破壊しながらのみ、労働者と農民の真のソヴェト制度は実現されるであらうし、社会主義に向かって進みうるであらう。

赤軍の兄弟たちへの《マフノー派》のアピール

足を止めよ！ 読め！ よく考えてくれ！

赤軍の同志よ！

君は、君の人民委員や司令官によって、マフノー派の革命的な反乱者たちと闘うために派遣されてきた。

君の司令官の命令により、君は平和な国々に廃墟をもたらすだろう。君は、個人的には君を知らない、しかし君が民衆の敵として教えられた人々を、搜索するだろう、逮捕するだろう、虐殺するだろう。君は、マフノー派は、山賊か、反革命派だ、と告げられるだろう。君は命令されるだろう、君はお願ひされるわけではないだろう、君は、君の司令官の忠実な奴隷として歩かされるだろう。君は逮捕するだろう、君は殺すだろう！ 誰を？ なぜ？ どんな理由で？

よく考えてくれ、赤軍の同志よ！ よく考えてくれ、《農民と労働者の権力》という大げさな名を持つ、新しい旦那方に無理矢理に屈服させられている、働くものたち、農民と労働者よ！

われわれは、抑圧と墮落に対して立ち上がった。われ

アナキズムと《マフノー運動》

マフノー軍は、アナキストの軍隊ではない。それは、アナキストたちによって編制されてはいない。幸福と全般的な平等についてのアナキズムの理想は、それがどのようなものであらうと、それがアナキストたちのみによって編制されていようと、軍の努力を通じて達成されることはありえない。革命軍は、最善の場合には、嫌悪すべき古い制度の破壊に役立つであらう。建設的な仕事、建設と創造のためには、論理的に力と命令にしかもつぎえない、どのような軍隊も、完全に無力であり、不吉ですらあらう。アナキスト社会が可能となるためには、工場や企業にいる労働者たち自身が、故郷や村々にいる農民たち自身が、命令や法律をいさかも認めない反権威主義的な社会の建設に着手すること、が必要である。

アナキストの軍隊も、孤立した英雄も、グループも、アナキストの連盟も、労働者と農民のための自由な生活を創りださせない。ただ、労働者たち自身のみが、自覚した努力によって、国家も旦那方もない、彼らの安楽を建設しうるであらう。

われは、よりよい、より輝かしい生活のために闘っている。われわれの理想は、権力のない、寄生者のいない、人民委員のいない、働くものの共同体に到達することにある。われわれの当面の目標は、ポリシエヴィキたちの権力のない、いかなる党の圧力もない、自由なソヴェト制度を設立することにある。

ポリシエヴィキ共産主義者たちの政府は、討伐をするために諸君を送った。この政府は、デニキンと、豊かなポーランド人たちと、白軍のはかの手合いと、急いで和を結んだ。それは、そうすることで、どのようなものであらうと権力の束縛に対して叛逆している、被抑圧者たちの、革命的な反乱者たちの大衆運動を、よりたやすく駆逐しうるからだだった。

しかし、白と赤の司令の威嚇は、われわれを恐れさせてはいない！ 暴力に対しては、われわれは暴力で応えるだろう！

もし必要なら、われわれ、一握りの人間たち、われわれは、政府派の赤軍を潰走させるだろう。なぜなら、われわれは自由であり、自由の熱愛者だからだ！ われわれは反乱している革命者だ。そして、われわれが擁護している大義は、正しい大義だ。

同志よ！ 君は誰ともにいるのか、君は誰と闘っているのか、よく考えてくれ。奴隷であるな。人間であれ！

マフノー派の革命的な反乱者

1

ビエール・ベルフォン社編集の『生活を変える』双書は、一九二七年にフランスで刊行された『ウクライナにおけるロシア革命』という題名での、マフノーの回想録の第一巻のみならず、のちにロシア語で印刷された、未訳の第二巻、第三巻のフランス語訳を刊行する。ここにあげた抜萃は、ベルフォン社の無償の許可による、第二巻からの引用である。

2

Nicolas Boukharine (1888-1938) 一九〇六年にボリシエヴィキ、一九一七年から死ぬまで党中央委員会のメンバー、一九二八年以来『右派』の指導者、輝かしい経済学者で理論家、スターリンに処刑される。

3

中央ラーダは、一九一七年十一月以来、新しいウクライナ民主共和国の一種の議会であった。一九一八年の初めにボリシエヴィキとドイツ帝国政府との間で締結されたブレスト・リトフスク条約は、オーストリア人とドイツ人にウクライナの門戸を開放していた。彼らはそこに、スコロパドスキーという『コサック首長』(かつてウクライナの『コサック』人たちが選んだ首長が帯びていた称号)によって主宰される、反動政府を作った。しかし、一九一八年末の中央帝国の敗北は、ドイツとオーストリア軍にウクライナから撤退することを余儀なくさせ、スコロパドスキーは逃亡した。彼のあとは、ラーダの元メンバー、ブルジョア分離主義者、ペトリウーラを指導者とする『執政官政府』が継い

だ。

4 ユンカー、田舎紳士を意味するドイツ語で、エルベ河の東の大地主の家族から募られる、貴族的な構成の、ドイツ将校団。

5 社会革命党の左翼のみが、当時、ボリシエヴィキと協力していた。

6 一九一八年四月十二日の夜、もっともらしい口実の下に、ボリシエヴィキ権力は、マライア・ドミトロフカの特等なホテル、モスクワのアナキスト諸グループ連盟の本拠を、警察・軍事力をもって攻撃し荒らせた。

7 十八世紀における、ツァーとポーランド王の軍隊に対するウクライナ民衆の蜂起の英雄たちの名を持つ、ウクライナの反動政府の軍隊。

8 ドゥイベンコについては、次の注を見よ。——マフノーは、ボリシエヴィキにとってまったく未知のものであったわけではない。というのも、すでに見たように、一九一八年六月、レーニンは彼を迎えているからである。

9 Paul Dybenko (1889-1938) 農民の子、水夫、一九〇六年にボリシエヴィキ、ロシア革命の際のクロンシュタットの人気弁士の一人。ウクライナで初期の赤軍部隊を指揮する。一九三八年におそらく処刑された。

10 ペトログラード(現在レニングラード)にある当時最大の精錬所。

11 マフノー派反乱軍の文化教育部門によって書かれた。

12 イタリア語で、バルチザンの首領を意味する。

13 『自由への道』(マフノー派機関紙)からの抜萃。

クロンシュタット 1921

クロンシュタットの反乱は、アナキズムのアンソロジーの中にかかげられるのに——大きくかかげられるのに——値する。自然発生的であるにもかかわらず、それは、特に絶対自由主義的なものではなかった。実をいえば、アナキストたちは、そこで大きな役割を果たしはしなかった。『クロンシュタットの反乱』(一九三八年十一月、一九四八年刊行)についての書物を書いている、イダ・メッツは、アナキストを招いている。その「アナキズムが、その見地から、労働者民主制の考えを普及させたその範囲でしか」見られなかった、と認めているのである。しかしながら、クロンシュタット革命委員会は、その中で地位につくように、二人のアナキストを招いている。その後、『クロンシュタット』を書いたE・ヤルチュックと、『知られざる革命』の中で、『勤労階級自身によって直接になされた……社会革命のまったく自立的な大衆的な最初の試み』クロンシュタットに、多大のペーシをさしている、ヴォーリンである。しかし、ヤルチュックも、ヴォーリンも、その時、彼らがボリシエヴィキの牢獄の中にいたために、クロンシュタット革命委

員会の招待に応えることができなかった。

読者は、反乱者たち、水兵たちと労働者たちの呪詛を、冷徹な事実の中にありのままにご覧になることとなる。われわれの目的は、確かに、彼らとともに、レーニンとトロツキーを嘲弄することでも、われわれの責任でまたその両者への悪罵と皮肉をいうことでもない。怒りが、反乱を、その表現の中で過度なものとし、部分的には不当なものとしたことは、あまりにも明らかである。その到達点がクロンシュタットとなった、一九一八年から一九二一年の間にボリシエヴィキ権力によって積み重ねられた誤ちは、十月革命の首謀者たちの、革命的な信条や天分を、何一つ否定するものではない。しかし、一九一七年の大衆蜂起の、下部における張本人たちであったのち、赤軍の将校生徒たちと蒙古兵たちの弾丸の下に死んでいった、あの水兵たち、あの労働者たち、彼らが、歴史家の客観性をわがものとすることができ、自分らの死刑執行人への讃歌を歌うことができるであろうか？

クロンシュタットの反乱の弾圧は、反乱の日刊紙『イズヴェ